


文は信なり

日本スチャン・ペンクラブ（略称JCP）発行・責任者 池田勇人
事務局 〒131-0043 東京都墨田区立花 4-6-13 三浦喜代子方
TEL&FAX 03-3616-8621 郵便振替 00170-0-161838
ホームページ アドレス・<http://jcp.daa.jp>

創立55周年記念の集い終了感謝号

去る10月15日～16日、日本クリスチャン・ペンクラブ
創立55周年を記念する感謝の集いが、東京お茶の水クリスチ
ャンセンターを会場に開催され、全国から50名に及ぶ会員が
参加し、喜びと感謝、希望の時になりました。



開会と開会礼拝



今回初めて実行委員の役目をいただいて準備に携わりました。最初から最後まで主が共におられ、祝福してくださいました。祈って下さった方々に感謝いたします。

大勢の参加者が与えられ、大変嬉しく思いました。遠方の方は夏期学校以来の再会の方々が多く、なつかしいお顔を拝見して胸が熱くなりました。

10月15日午後2時半、開会宣言に続いて、実行委員長三浦喜代子氏から歓迎の挨拶と経過報告がありました。続いて実行委員、理事会、各ブロック毎の参加者の紹介があり、盛大な拍手でお互いに歓迎し合いました。（2ページへ続く）

開会礼拝『愛すること 赦すことー平和を求めてー』JCP理事長池田勇人師

開会礼拝では、池田理事長がアッシジのフランチェスコの平和の祈りを紹介して、メッセージを下さいました。キリストが十字架上で「父よ。彼らをお赦してください。彼らは何をしているのか自分でわからないのです（ルカ23：34）」と言われましたが、なぜ『わたしが赦します』と言わず、『赦して下さい』と願ったのでしょうか。それは、キリストが中保者となってくださったからです。キリストが贖罪の業として、罪人と神の両手を握って下さいました。

わたしたちの書くあかし文章の一文、一行がこの世の人と神を結ぶ道筋となるようにと語られました。（報告 島田裕子）



スケジュール

	15日(月)	16日(火)
9時		第2回講演 講師黒川知文氏(*7) 『ドストエフスキーの信仰と文学』
10時		記念撮影 ブレイク 10時半～総会・ブロック報告(*8)
11時	スタッフは11時OCC集合 準備室415号室 会場416号室	閉会礼拝 副理事長玉木功氏 11時半 解散 (*9)
12時		* 奏楽 川崎早智子 * 1 司会者 駒田 * 2 司会者 小川 * 3 世話役 浅見 * 4 司会者 山本 * 世話役 長谷川 島田 * 5 記念撮影 長原 * 6 司会者 三浦 * 7 司会者 西山 * 8 司会者 浅見 * 9 司会者 坂口 ☆ 宿泊世話役 浅見 ☆ 会場渉外 西山 ☆ タイムキーパー 三浦
1時		
2時	受付開始 (*1) 2時半～開会礼拝 理事長池田勇人氏	
3時	第1回講演 講師大田正紀氏 『祈りとしての文芸 山本周五郎と聖書』(*2)	
4時	ブレイク	
5時	夕食会準備(全員で) (*3)	
6時	感謝夕食会 (*4) 記念撮影(*5)	
7時	7時半～9時 (*6) 音楽と感謝の集い 演奏 岡山徹&真弓夫妻 トーク 池田、玉木、久保田、川上	
9時	解散 宿泊者はガーデンパレスへ	



第1回講演 大田正紀氏『祈りとしての文芸・山本周五郎と聖書』

山本周五郎は小学時代、父に連れられて教会の日曜学校に通った。作家となってからも机の上にはいつも聖書があり、就寝前に深い祈りを捧げる人であった。小学校を卒業して質屋に奉公し、貧しい人の生活を身近に体験したことが作品に多く生かされている。そのテーマは聖書から取られていることを知った。例えば『ちくしょう谷』はゆるし、『五瓣の椿』は復讐、『赤ひげ診療譚』は罪意識などである。現代人のためのヨブ記『おごそかな渴き』を書き出して、未完のままに召されたことはまことに惜まれる。私自身、単なるヒューマンイズムの作品ではなく、もっと深いものを感じていたが、キリスト者だったとは知らなかった。知らない人が多いのではなかろうか。洗礼も受けず、教会へも行かなかった。けれど誠実に神を求め、真摯に問いかけ、必死に祈る信仰が実を結んだ文学だと思う。神はよしとされ、その生涯を用いられた。 (報告・小川恵子)

感謝夕食会

気がかりだった食事会の準備も、その前におこなわれたブレイクを通して、みんなが打ち解け和気藹々となり、大変なごやかな雰囲気の中で進めることができた。

午後6時、川崎姉伴奏により聖歌498番「うたいつつあゆまん」を声高らかに歌い、心から主を讃美して楽しい夕食会が始まった。

食事は増本の「すみだ川弁当」。これがまた美味しかった。そして食事会の間にも、関西ブロックからは前山姉が、中部ブロックからは水谷姉が、関東ブロックからは北川姉がそれぞれブロックを代表して、活動状況や今後の抱負等を語ってくださり、いっそう会を盛り上げてくださった。

最後に浅見理事と長原兄の指示のもとに、みんなで見事なほどスムーズにテーブルの移動を行い、喜び笑いながら写真を撮ることもできてほんとうによかった。感謝！ (報告・山本披露武)



『音楽とトークの夕べ』

夕食後の7時半から始まった。まずは岡山徹&真弓夫妻によるトロンボーンとピアノの演奏。「やすけさは川のごとし」から「アヴェ・マリア」、「ガブリエルのオーボエ」などが曲にまつわる説明の中で演奏されていた。

クリスチャン音楽家滝廉太郎、岡野貞一、山田耕筰の唱歌『荒城の月』、『ふるさと』、『おぼろ月夜』、『赤とんぼ』の曲に会衆一同が身体を揺すってリズムに合わせ、目をつむって聞き入っている光景は「何と幸いなことか」と思った。郷愁がかき立てられ思わず胸がキューンと鳴った。トロンボーンとピアノが室内いっばいに流れ、幸福感に満たされた。

池田、玉木、久保田、川上先生方のトークでは、それぞれのお立場や経験から、重みのあるお話をお聴きでき、心にずっしりと受け止めることができた。特に、戦争によって、日本人のみならず他国の人々の苦難苦悩も知ることができ、平和への願いを強くされた。（報告・長谷川和子）



第2回講演 黒川知文氏『ドストエフスキーの信仰と文学』

—クリスチャンはどのような小説を書くことができるか—

黒川知文氏の講演は、興味深いサブタイトルも付いて聞き応えのあるものでした。中でも内村鑑三の日本は、大文学の産まれにくい風土社会状況の見解から、神の思想、天意、文学者と宗教の対立に至るまでの話に続いて、外国の作家、ドストエフスキーの原体験、十年間にわたる服役や家族の死に至るまでの流れ、シベリヤ流刑による信仰の深まりを示されました。そこから神と罪との間に苦悩する様々な人間を描いた「カラマゾフの兄弟」「罪と罰」に倣うことを多く与えられました。クリスチャンの書くことができる小説とは…救いや信仰を直接あかしする自分史にもとづく小説、事実や経験にもとづく信仰者の伝記、聖書物語、歴史小説、純文学—にまで及んで、日頃私たちがペンクラブで紡がせていただいていることの上に、さらにこれから学び実践していくことの指針と視点を拡大していただきました。（報告・西山純子）

閉会礼拝・苦難に勝利した玉木師による締めくくり

盛り上がった会を締めくくる大切な閉会礼拝だった。玉木師の迫力ある説教で大切な会の盛り上がり締められ、それぞれ与えられた賜物を胸にして別れを惜しんでいた。

玉木師は、50周年記念会以後、胃がんを患われ、大変な手術の後、牧師としての仕事を全うしてこられた。そればかりか、ご長男の真一さんが天に召され、嘆きはしばらく師の心を占領し、悲痛な毎日をすごされた。中部ブロック礼拝・文章研究の時、わずかながら本音をもらしておられた。

苦難は師を倒すのではないかというほど激しいものであったが、神は師に勝利の軍配をあげられた。55周年記念会はみ手のうちにあって進んできたが、それに恥じないだけの閉会礼拝であった。

ほんとうに有意義な二日間だった。

(報告・坂口良彬)



参加者からの感想

実り多い55周年記念会 佐藤一枝

記念会が終わって10日ほど経ちましたが、私の心の内には今まで味わったことのない喜び、感謝、希望の炎が燃えつづけています。そこには御聖霊の助け、皆の祈り、御愛労の数々があつたことと思います。JCPにはこの暗い世間を照らす光りと愛が満ちていると、実感した2日間でした。

個人的には、関西ブロックの古くからの友人に久しぶりに会えた喜び、以前夏期学校でお世話になった先生方に再会できた嬉しさでいっぱいになりました。一時退会して復帰5年目の私にはすべてが感謝、感謝の記念会でした。講師の先生方の貴重なレジメを今じっくり読み返しているところです。玉木先生、久保田先生、川上先生のお証しは、初めてお聞きすることばかりで、ノートを読み返しながらかんがえず涙し、深く考えさせられたりしています。

岡山ご夫妻の演奏は疲れた身体も緊張した心もほぐして下さり、最高でした。感謝です。

赤い帽子とペンクラブ 前山英子

午前中に仕事を済ませ、再びJR東京駅へ戻ってきた。お茶の水へ行くため、中央線のホームへ上がった時だった。「前山さあーん」と言う女の人の声がする。「こんな所でわたしの名前を知ってる人って誰」といぶかりながらキョロキョロしていると、電車の中から手を振っている人がいる。

「赤い帽子で前山さんと分かったの」聞き覚えのある声は中部ブロックの水谷、田中両節子さんであった。思わぬ所で二人に出会い、一人旅の不安は吹っ飛んだ。

6、7年も前のこと、軽井沢の文章教室に参加した。散歩の途中、とあるお店で真赤な帽子を買った。それからというもの、私はトレードマークのよう、この帽子をペンクラブの集いに着用してきた。55周年の集いは真赤な帽子に先導されて始まり、赤とんぼの大合唱でクライマックスに達した。

JCP55周年記念会感想 堀川きみ子

トロンボーンとピアノの美しい音色。胸を打つお話の数々でした。

中でも二つの講演会での学びは、興味深いものでした。ここで私は、一つの示唆を与えられました。山本周五郎とドフトエフスキー。二人の作家の作品は、苦しい生涯と信仰の中から産まれて来たものであることや、また健康の面においても、ドフトエフスキーは度々「てんかん」の発作に悩まされ、60歳で死去。山本周五郎も結核、肝炎、心臓衰弱で64歳で死去したことを学びました。私は今まで、あかし文や詩に取り組んで来ましたが、物語や小説は想像や虚構の世界で、自分の手の届かない分野とばかり思っていました。

黒川先生の「クリスチャンは、どのような小説を書くことができるのか」の最後では、JCPですでに挑戦してきた課題の幾つかが入っていたことに驚きました。あかし文の「私」を第三者の名前に変えて書いたなら……。

私には不可能としていた新しい分野が、遙か彼方の延長線上に見えてきました。

魂を魅了した55周年 藤本優子

書くことは、神から託された使命であることを明確に示されて、私は喜びと感謝に溢れています。

書きたいとの思いは神からのものであり、私をペンの働き人に召して下さっていることを確信することができたのです。

日本においては、聖書を神の言葉と信じる者にされたこと自体が奇跡です。そして、神のものとされた人々には、それぞれにふさわしい特別なご計画を神が持っておられるということ強く感じました。時には惨めな自我に泣き、四苦八苦の現実ですが、それゆえに神に近づけられ、神の深い愛を知り感涙にむせびます。何度も立ち上がる勇気をもって、厚かましいほどに神の御座に立ち続けるならば、人として最大の奇跡を体験したラザロの如き歓喜を、神は私の人生にも実現してくださることでしょう。魂を魅了した集会を心から感謝します。

JCP東京で感じたこと 松本瑞江

始まっていた礼拝で「あの戦争は何だったのか。過去に目を閉じる者は未来を見ることはできない。勇気ある戦責告白こそ、平和の第一歩である」の池田勇人先生のことばが、私の胸に熱く飛び込んできた。

第一回の講演大田正紀先生の「祈りとしての文芸——山本周五郎と聖書」、第二回講演黒川知文先生の「ドストエフスキーの信仰と文学」。JCP55周年記念のこの二つの講演は、これから何かを書きたいと思う者にとって、重く、深く考えさせられる内容だった。閉会礼拝で玉木功先生が「人間の生命やその存在はやがて消えて忘れられるが、書いたものは残る。墓石ではなく書物を残して、人の心にとどくような文書伝道に生きよう」と祈られた。

久しぶりに会うペンの友は、みな懐かしく温かかった。帰路、私の父の出生地である瑞江（東京都江戸川区）という街へ富岡さんが案内してくださり、緑風の中、散策を楽しんだ。感謝でした。

55周年記念の集いに寄せて 富岡国広

JCP55周年記念に初めて参加させて頂いた私は、またしても「主よ、私の不信仰をお赦しください」と叫ばずにいらませんでした。

池田師の礼拝に始まり、大田先生の講演、そして私にとって何よりも岡山夫妻のトロンボーンとピアノによる演奏は、至福の時、素晴らしい一期一会の場となりました。（7ページへ）

さらに先生方のトークに心揺さぶられ、二日目の黒川先生の「ドストエフスキー」の講演では多くを学ぶことができました。

また、最後には予想もしなかったことですが、松本瑞江姉と、姉の名前の由来—父親が命名された—といわれる江戸川区瑞江町の地に同行することができました。(事の詳細は後にゆずることになります)。神の祝福をひしひしと覚える二日間でした。

この集いのために特に祈ってこなかった私だけに、それが冒頭の叫びとなったわけです。この度の素晴らしい交わりの場を設けてくださった実行委員の方々に、主が豊かに報いてくださいますようにと祈ります。





55周年を終えて 池田勇人理事長より

同じ時代に、同じ使命を与えられているもの同士が、同じ場所で、同じ学びと交わりができた

55周年の集い！主と皆様に、心から感謝しております。

「唄を忘れた カナリヤは／象牙の舟に 銀の權／

月夜の海に 浮かべれば／忘れた唄を 思い出す」(西條八十 金糸雀4節)
キリストの救いという舟に乗せ、あかしのペンという銀の權を握らせてくださる
主のご期待にこたえて、さあ共に前進！ ではまた・・・在主はやと

55周年を終えて 実行委員長 三浦喜代子氏より

実行委員会では55周年記念の集いに、サブタイトルとして【喜び 感謝 希望】を掲げました。その通りに、集いが皆さまにとって大きな喜びとなり、主イエス・キリストへ感謝となり、

あかし文章への大きな希望となったと信じて主の御名を崇めます。

今後、各ブロックの活動はいつそう充実発展していくことでしょう。それぞれの場でひたむきに前進してまいりましょう。再び一堂に会する日を待ちのぞみつつ。ハレルヤ！

55周年記念感謝の集い会計報告書

(収入の部)		(支出の部)	
参加費	323,000	会場費	77,175
献金	314,634	謝礼	110,000
広告代	24,000	レセプション	75,677
		パンフ印刷	189,905
		実行委員会	98,370
		案内書作成送付	39,819
		事務局諸経費	10,000
		残金	80,688
合計	681,634	合計	681,634

左記のように55周年の会計を報告いたします。残金は次回あかし新書発行準備金とさせていただきます。

55周年実行委員会

池田勇人 三浦喜代子 駒田隆
浅見鶴蔵 山本披露武 西山純子
長谷川和子 島田裕子

***本誌は『文は信なり』
18号になります。**